

ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

# ふるさと 風

第175号（2020年12月）



白井啓治

（十四）全員に歓びの笑顔

（2008年12月18日）

『幸せは何処にでも居てくれる』

最近よく何にも良い事が無い、という声を聞く。しかし、果たしてそうなのだろうか。目を凝らしてよく見れば、また見方を変えて考えれば、身の周りには意外に沢山の良い事があるのではないだろうか。

「雑草だって目守れば花の綺麗」

何年か前に詠んだ一行の文である。名も知らぬ小さな雑草の花なんて、よほど意識して目を凝らさなければ綺麗な花だと気付くことはない。幸せの同一線上にある喜怒哀楽というのは心の問題なのだから、心を見る目の向け方次第で私達は嬉しくもなり哀しくもなる。だから心を見る目を何時でも喜びの方向に向けていれば、幸せは何処にでも居てくださるのだ。

さて、この雑文も今年が最後である。次に書くのは年の明けてからであるが、その時にはもう初夢も見終わっていることであろう。幸せな

初夢もあるだろうし、絶望的な初夢もあるだろう。ゆめは「夢」と書くのであるが、元は「寝目（ねめ）」と書いた。夢というのは、元の漢字に示されているように、寝ている時の目で心の中に潜んでいる無意識の真実なる感情を見ることを言うのである。



（絵：兼平智恵子）

で、私はこう考えている。何時も悪い夢しか見ない人というのは、寝目を凝らしていないからである、と。夢というのは単なる絵空な空想ごとではなく、寝ている時に存在している心の現実である。

現実というものには必ず表裏があるものだから、悪い夢しか見ないという人は、幸せは何処にでも

居てくださる、ということをお忘れずに寝目を幸せに向けて凝らすことをしないからだと伝える。

このところ経済も悲観的なことばかりが言われ、現状の不満だけを横行させている。希望を紡ぐことをすっかり忘れてしまっている。希望は確りと紡がなければやってこないし、生まれる事はない。希望を紡ぐためには、己の目を希望に向かせ、凝らさねばならない。悲観の先には悲観しかない。希望の先には希望しかない、という事を切実に心に刻み込んで、今年を終わることにしよう。

（本稿は故白井啓治氏が常陽新聞に2008年7月より約1年間に亘り掲載されたエッセイを載せています。）

## ふるさと風の会会員募集中！

当会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間達を募集しております。

自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

会費は月額2,000円。（会報印刷等の諸経費）

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

打田 昇三 0299-22-4400 兼平智恵子 0299-26-7178

伊東 弓子 0299-26-1659 木村 進 080-3381-0297

編集事務局 〒315-0014 石岡市国府 4-3-32 (木村)

HP <http://www.furusato-kaze.com/>

大統領選挙のニュースをテレビで見ている「テキサス州・ニューメキシコ州の開票結果」という言葉を聞き懐かしくも不思議に思ったのは、あの広大な場所の何処に選挙民が居たのか？という疑問である。古い話になるが陸上自衛隊員であった私は昭和五十四年の十一月に当時の新聞にも大きく報道された「ミサイル部隊の実弾射撃訓練」要員としてアメリカ陸軍の基地及び射撃訓練場に出張させて頂いた。其の際に行った先がテキサス州とニューメキシコ州なのである。

ミサイルどころか小銃さえも定期的な射撃訓練と手入れ以外には触ることも無い後方機関の武器補給処に入隊当初から勤務していた私が、ミサイルと言う途方も無い武器の射撃訓練でもアメリカ大陸に出張する…という機会を与えられたのは幸運にも良い上司に恵まれたからである。

昭和二十九年一月に立川から土浦市右衛門へ移駐開設以来、勤務していた其の組織に何十年ぶりで始めて、一人だけ其の割当がきたのだが、該当する一般隊員は何百人も居たから本来は総務部長が人選措置をされるのである。しかし、私が所属していた当時の技術部・部長がミサイル部隊の長から転勤して来られた方であり、然も何人か居られた部長の中でも最古参であったから、必然的に其の「割り当て通知書類」が回されて来た。

庶務担当であった私は其の書類を部長に提

示して対応を伺ったところ、部長はろくに書類も見ず「…お前が行け！」と簡単に言われたのである。

こうして自衛隊でも一番に後方の補給処しか知らない私がミサイルという最新兵器の部隊に臨時編入され、国内各地の訓練場で鍛えられてからアメリカ大陸へと出かけることになったのであるが、此の部長が後に副処長として着任され、私も総務課勤務になったので、再度、身近にお仕えすることが出来て幸運だったと感謝申し上げている。

話を戻して、私の米国行き其の当日は部隊行動で日本航空便の利用となり、まずサンフランシスコまでが九時間、当然ながら時差があるから「時差呆け防止」のために其処で一泊。市庁舎、FBIの支局、映画ロケ地、金門橋、チャイナタウンなど、市内を見学させて貰うことができて、先ず「アメリカ」と言う国を知る。

翌日は早朝にアメリカン航空七二七型機でロスアンゼルスへ、此処でも乗り換えだが此の空港はやたらと広く飽きる程を歩かされる。メキシコとの国境にある「エルパソ」行きの同型機で米大陸沿岸部を飛ぶのだが、途中にアリゾナ砂漠地帯が開けるから空からの景色は期待できない。機内食を御馳走になった記憶は無く、何時間かして急に搭乗機が降下し始めたので窓外を覗くと未だ砂漠：「不時着」を覚悟したところ其処がメキシコとの国境にある都市「エルパソ」の空港であり、駅前では西部劇に出て来るような服装の男性を見かけたので「アメリカへ来た！」実感が湧く。

出迎えのトラックで市内を抜けてから砂漠

地帯に行くこと約一時間、何処までも真っ直ぐで他に車も通らない道を疾走して到着したが、茨城県と同じくらしい面積が有る「ミサイル射撃場」と其れを管理する米軍基地である。

射撃場は広くても基地は小規模で其処に宿泊設備・管理要員の宿舎・食堂・売店などが完備しており日常生活に全く不自由は無い。それどころか、野外の基地であるのに、朝食時に出る卵の焼き方について、一人一人、「目玉焼き」「煎り卵」など好みを聞いてから出してくれた。しかし砂漠の中であるから夜になると周辺

に野獣や毒蛇（ガラガラ蛇）が出没するらしく、私が滞在中にも是に噛まれた者が居て、応急手当後に日本へ緊急送還された。噛まれると全身が変色し生命に危険が及ぶとか、現地では治療すれば…と思うが医師会と毒蛇が協定している訳では無いとしても米国は医療費がやたらと高いらしい。

其の現場で私に与えられた任務は「ミサイル発射訓練中は担当者以外、誰も其の地域に入れないといけない！」という警備であり、階級が上の自衛官などが視察と称してやって来るらしく、図々しい？其の連中を阻止するのが私の役目であった。上官を偉いとは思わないで「ダメ」と言える？「ふてふてしさ」だけが頼りの仕事である。

幸運にして毒蛇にも不意の来訪者にも逢わず、更に所属した中隊のミサイルが、遥か遠方の目標に無事命中したらしく満点の成績を取った。其処を離れてエルパソ市に在る基地に戻る。エルパソの本来の名称はスペイン語で「エル・パソデラノーチェ（北方の出口）」：

メキシコとはリオ・グランデ河を隔てた、西部劇に良く登場するガンマンたちの活躍の場であった。現代は其処にアメリカ陸軍の防空センターが有り、其の施設の面積が土浦市の面積と同じぐらい…と聞かされて、大日本帝国は此の大国とよくぞ戦ったもの…と呆れた。

地域内には当時の日本に未だ無かった巨大スーパーマーケットが有り、多くの日本女性が働いて居た。米軍の沖縄駐留時に結婚して来たらしい。

時差呆け防止の目的から其処に滞在していた間にバスを頼んで「ホワイトサンド」と言つ、辺り一帯が砂の大地である場所へ行き、更にメキシコのフワレス市へも行った。メキシコへは徒歩でも行けたが国境を越えた途端に道路が悪くなる。帰りにタクシーに乗ったところ発車直前にドアが外れてしまったけれど、運転手は慌てずにドアを戻し「安全運転？」で宿舍まで送ってくれた。

帰国はコンチネンタル航空機でエルパソ空港を発ち、ロスアンゼルスで乗り換えてハワイを経由する。是も帰国後の時差呆け防止策である。新婚旅行の聖地ハワイに不粋な制服姿では情緒も無いが「ハワイに行った!」という実績だけは残る。

十五階建ホテルに泊めて貰い、翌日はアメリカ名の日本女性がホノルル市内をガイドしてくれた。

正直に言つと、かつて「憧れのハワイ航路」などと言う歌も有ったが、短期間の所為かハワイで見るべきものは無く、ホテルの窓から夕日を眺め、朝のワイキキ海岸を散歩してから海岸

部に在る陸軍の施設を一見して終わる。更にホテルの部屋に置かれたテレビで「日本の番組」も見られたから「真珠湾攻撃」は兎も角、ハワイも日本の領土なのであろうか?と錯覚することが出来た。

ハワイからも日航機で、当時流行の「寅さん」の映画が機内上映される。無事に成田空港着、編成された射撃部隊は解散し私は原隊に復帰したのである。正直なところ、私は其の公務旅行で初めて航空機に搭乗したのだが、俗に言う「空を飛ぶ快感」を味わったから定年退官・再就職後には毎年一回、何処かへ出かけることに決めた。幸いに再就職がつくば市に在る農林水産省研究機関の外郭団体であったから年末年始には公務員並みに休みが取れた。其処が管轄する旅行会社に任せて行く先を決めていたのである。幸運に感謝している。

地域に眠る埋もれた歴史(66) 木村 進  
【4 大増・太田・恋瀬地区】(3)

#### 4.3 善光寺楼門 太田字堂山948

善光寺楼門は、室町時代中期の建造と見られ、県内最古の木造建造物といわれています。国の重要文化財に登録されています。立派な茅葺屋根を持っています。

楼門というのは2階建ての山門を言いますが、この楼門は1階建てです。2階部分を造りながらも、何らかの原因により完成を断念した「三間一戸楼門」の形態です。



善光寺楼門

この先の少し上ったところに善光寺の立派な本堂がありますが、途中で屋根を瓦に変更した影響か重みに耐えられず現在は崩壊寸前です。また善光寺の裏手には小田一族の墓と見られる大きな五輪塔が並んでいます。旧暦の6月14日には夜を徹して行われる「太田の万灯」の祭りが行われていましたが現在は中止されています。

山門の左右には仁王様(阿形像、吽形像) 国指定重要文化財

善光寺楼門(ぜんこうじろうもん)

小田城主代2代。小田左衛門尉成治公の母堂は小田家の菩提寺である山之莊村小野の「新善光寺」を深く信仰され、出家の身となり、「雪主比丘尼」と号した。成治公は、母堂の願いから善光寺再興を図り、新治郡井白郷館莊太田月

光山麓を安隱の地と選び、文龜元年（1501）「月光山無量寿院善光寺」を建立し、新善光寺を此処に移した。

元禄14年（1701）11月、善光寺は現在地の堂山に移されたが、当時を偲ぶ建造物は楼門のみとなってしまった。

2階は、緑と内部が一連となる厚板を切目状に並べ、この上に土居を置き円柱を立てている。側柱は上部粽付とし、台輪をまわし手先肘木の組物を乗せながら、その上部は未完成であるが、「楼門」の名称で重要文化財の指定を受けた。平成5年度から7年度にかけて、楼門の解体修理が施工されたが、建築に関する記録は一切発見されなかった。と書かれています。

私はこの善光寺楼門と行方市にある西蓮寺の仁王門とが類似しているので、ここに少し比較を載せたい。

### 善光寺楼門と西蓮寺仁王門

石岡市の八郷地区にある建造物で国の文化財に指定されているのは2つだ。

佐久良東雄の生家と善光寺楼門である。

この善光寺の楼門と呼ばれている仁王門と行方市にある西蓮寺の仁王門にとっても似た特徴がある。これは専門家などによって語られる場合が多いのだが、少し写真などを使って比較してみたい。まず石岡市太田にある「善光寺楼門」である。国の有形文化財（建造物）に指定されている。

文龜元年（1501）にこの先の山（月光山）に

寺が建設されたとされる。

その後、元禄14年（1701）11月に現在地に移され、この門だけが当時の姿として残された。最初は2階建ての楼門とする予定で造られたが、2階部分の建設を諦めて、1階の仁王門となった。屋根裏を見ると上層部の軸受けと上層回縁の腰組、旧小屋梁、組物などの一部が残されているという。ここからは西蓮寺の仁王門です。



西蓮寺の仁王門

↑現地に置かれている説明板より↓

「仁王門は、天文12年（1543）建立されたもので、もとは三間一戸の楼門であった。天正4年（1576）の修理後、寛政年間（1769～1801）

に楼門の二階部分を取毀（とりこわし）して山門（一階建）となった。

その後、安政七年（1860）に現在地に移築され、仁王門に改められたものである。」

この善光寺の門と西蓮寺の門は、ともに2階建ての楼門として建設が予定されたが、善光寺は建設を諦め1階建てで終わるも「楼門」として国の認可を受けた。一方、西蓮寺の方は最初2階建ての仁王門として建設したが、移築した時に1階建てに変更した。

しかし、こちらは「仁王門」として国の認可を受けたものである。

分かりにくいですね。年代として善光寺は室町時代中期（1501年？）の建設であり、西蓮寺は室町時代後期（1543年？）の建築とされています。

善光寺楼門の屋根は八郷の茅葺き屋根保存会で吹き替えや維持管理がなされているようです。どちらも室町時代の門で戦国時代の宿命で仁王門の維持管理が難しかったのかもしれない。

善光寺楼門の奥は広場となっていて、その奥に階段を上ると善光寺の本堂があります。

これがまた屋根が崩れて大変になっています。小田家の新善光寺信仰がこの地に新善光寺を移して建立されたものと思われます。

善光寺楼門を紹介しているところは結構ありますが、善光寺の紹介は少ない。しかし本堂の

屋根が崩れてしまっていることだけに注目が集まったり、この場所で仮面ライダーや忍者戦隊などの子供向け映画撮影が行われたりしていることは紹介されるのですが、寺の内容はほとんど記載されていません。写真などを添えてわかる範囲で紹介しておきます。文化財の指定を受けているものは入口に立つ茅葺き屋根の仁王門「善光寺楼門」のみです。

このためか、門をくぐったところは広場があり遊具やお年寄りの遊び場（健康維持？）となっています。



この境内広場には「太田田園都市センター」という公民館のような建物が建っています。

この広場の先の小山の上に寺の堂宇があるのですが、現在ではかなり屋根が崩れかけています。



善光寺楼門から見る（正面階段上が善光寺）



善光寺本堂（屋根が重みで一部崩壊している）

以前見たときより状態はかなり悪化しており、映画やテレビの忍者ものなどの撮影はもうできないでしょう。寺の周囲にはロープが張られていて、中に入ることを制限しています。入口の上には龍の彫物が彫られています。なぜここまで放置しておいたのでしょうか？理由はいろいろあるようですが、まだ一部が崩壊していた段階で修理して文化財に登録されていれば手のつけようはあるのでしょうか、今はとても見るに絶えません。

このお堂の屋根は大変立派で、建物も江戸時代中期頃に屋根は藁葺きで建てられたのではないかと思います。軒が長く出ています。屋根を支えている「斗栱(ときょう)」から更に先に支えるべき木組みが、楼門の方は「三手先(みてさき)」と二段に組まれていましたが、本道の屋根は「二手先(ふたてさき)」のようです。藁葺き屋根なら、この構造で持ったのかもしれませんが、瓦屋根にした時に重みに耐えることができなくなってしまったのかもしれない。とても残念です。(万灯祭などは次回へ)

### 我が労音史(25)

木下明男

20代に参加した労音運動は、1970年からは労音の中心活動家として参加しています。そして、労音改革の責任者の一翼を担う様になり、実践の中から学んだ内容を記述していきます。

## 1995年の社会情勢と音楽状況

政治的な腐敗と反動化が進み、高度経済成長長期に仕事一辺倒の“働き蜂”も低成長期に入る。当時の読売新聞が行った世論調査によれば、日米安保条約の廃棄を求める声、存続を求める88%を上回り52%に達した。勤労者の生活では、余暇の充実を求めるが83%、そうでない人の14%を5倍上回っている。「仕事のほうが大切」と考えている人でも、79%の人が「余暇を充実させたい」と答えている。

WHOが、世界のエイズ患者は累計100万人を突破したと発表(8年後には4000万人に)。国連初の世界女性会議が中国の北京にて開催される。中東和平に力を尽くした、イスラエルのラビン首相がテレアピブで暗殺される。死者約6500名(行方不明を含む)を出した、阪神淡路大地震が発生。死傷者5500人(死者12人)を出した、オウム真理教による地下鉄サリン事件が発生。沖縄で米兵の少女誘拐・暴行事件に市民の大抗議集会が起こる。東京都知事に青島幸雄、大阪府知事に横山ノックがそれぞれ就任。コスモ信用組合・兵庫銀行・木津信用組合が経営破産となる。

この年逝去された、著名な音楽家・文化人…大宮真琴(音楽学者)・米川文子(地唄・箏曲)・丸木位里(画家)・水谷八重子(俳優)・五味川純平(作家)・金子信雄(俳優)・山口瞳(作家)・ミケランジェリ(P)・ノイマン(指揮者)

## 1995年の労音の動き

43回総会は、新体制の下に運営委員会・プロック討議の充実を図る。会員や委員の意見を運動に

取り入れ、例会を成功させる体制を強化する。これらを柱に、機関誌の充実、地域を生かす企画の充実、労音独自の企画研究と健全財政の確立。多数の会員や委員が参加できる友好祭や各種集いの計画と演奏サークル活動の充実、他団体との協力共同。また各地域センターや会館を労音運動発展のために有意義に活用させる等の目標が確認された。

長引く不況からくる消費の冷え込みのなかで、音楽会の回数は増え続けており、海外からのアーティストや大型企画のバレエ・オペラ・オーケストラ等の引越し公演、ソリストの来日公演も歯止めが掛からず、音楽会の飽和状態が進んでいる。そのため過当競争がより激しくなっており、業界全体が自転車操業の事態になっている。少しでも公演リスクを減らすために、大手の音楽事務所から共催依頼やチケットの委託販売が増えている。停滞で前進できなかったもう一つの側面として、例会政策を活動家・事務局員を含めた労音全体のものとする事ができず、運動の先頭に立つ気概にかけがえがなかった。

クラシック例会は厳しい状況の中で、東京文化会館大ホール企画の失敗が大きな赤字の要因になった。「スプリングガラコンサート」や「シネマフアンタジー」等の昨年好調だった企画も減少傾向の歯止めにはならなかった。クラシック音楽の状況は不況にも拘らず、バレエ・オペラ・オーケストラ等の海外一流演奏家公演が目白押しで、入場料も高くクラシック音楽愛好家の枠を狭めている。テレビ・ラジオ・新聞社をはじめとする企業が、共催・後援・協賛という形で経済的にも協力して、メディアを使った宣伝を大々的に行い、労音のコ

ンサートは話題にも上がらない状況にある。サントリールホール・オーチャードホールにみられるように、町と会場の雰囲気参加者に影響し、東京文化会館のイメージ低下もある。企画を立案するにあたり、動員目標や企画意図の視点が弱い、スタッフの力量も劣っていた。

創立40周年と戦後50周年を記念し、オリジナル企画の合唱曲カンタータ「脱出」を、全力で取り組んだ。サークルや民主団体にも呼びかけ、200名超の合唱団を組織、平和に対する熱い思いを歌い上げることができた。組織は1400名に終わり財政目標に達することができなかった。恒例の第九例会も、2ステージ3000名に終わりやはり財政目標の達成はできなかった。「プリセツカヤとポリシヨイバレエの仲間たち」は5回のステージで1万名を組織し大成功したが、「モスクワ音楽劇場バレエ」は大変厳しい取り組みとなった。東京文化会館6回と府中の森芸術劇場、松戸森のホール各1回の計8回公演を取り組んだが、長引く不況ムードと他団体の海外バレエとの競合から組織が伸びず大きな赤字を生んだ。

ポピュラー例会では、前年を上回る83回の例会を行なった。1例会当たりの組織数は880名(昨年903名)で、相変わらず不況と社会不安の影響が大きく反映している。好評だった例会は、尾崎紀世彦・由紀さおり、安田祥子・金子由香里で、毎年好評の美輪明宏は組織が伸びなかった。初めて取り組んだ「りんけんバンド」は、居りからの沖縄音楽ブームの追い風に乘れず、高い内容評価にも拘らず組織が伸びなかった。今年度は、吉幾三・弦哲也・鳥羽一郎・山川豊等の演歌例会が成果を収める。最近の傾向として、「森山良子コンサート

トツアー96」「西城秀樹コンサートトツアー96」のように、全国トツアーとして製作された企画は、イベントと同じ内容の企画で、今後の課題として、全国の労音が協力して、労音ならではの企画制作をして全国トツアーを作ることです。

伝統音楽では、高橋竹山のコンサート活動中止で、目玉企画がなくなつたが、東葛ブロックと府中ブロックが、「鼓童」で大きな成果を上げた。南部ブロックでは「柳家小三治」城北ブロックでは「民謡大塚文雄」を取り組み、成果を上げ、「高橋竹与・高橋竹童」や「荒馬座」の企画も取り上げ、新しい伝統音楽の企画を模索していく事が話された。全国共同企画として、キューバから「エレーナ・ブルケとグループ・ライソン」ボリビアから「グループ・アイマラとルスデル・アンデ」を海外民族音楽企画として取り組んだ。キューバの民族アンサンブルは、北海道旭川から山口まで全国8回が取り組まれた。東京では府中・都心・東部・北部で取り組む。ラテン音楽缶蹴りに大きな反響を呼んだ、ボリビアの民族アンサンブルは、府中と都心で取り組まれたが、内容の好評さに反して組織的には減少。

例会外の活動として、今年も広島で開催された原水爆禁止世界大会に、カンタータ「脱出」の成果を携えて12人が参加。夏の友好祭には、全ブロックから101名が集い二日間を甲武キャンプ場で過ごした。

全国的に厳しい労音運動の中で、大きく前進している関東労音。前年誕生した深谷市の「虹の音楽鑑賞会」は500名から1400名に組織を拡大。所沢労音・佐野音鑑でも会員数を伸ばし、新たに狭山で労音が誕生した。全国労音は、伊豆長

岡の富士見ハイツで、41団体82名が参加して全国労音連絡会議を開催した。状況は相変わらず厳しく、上伊那労音・大分音楽友の会・中津労音・湘南音楽が解散し加盟団体は61団体になる。阪神大震災で被害を受けた神戸新音や被災団体への再建義援活動に取り組むことを決議した。

財団「全国労音会館」の活動は、海外招聘共同企画キューバ民族アンサンブル30回、モスクワ音楽劇場バレエ8回、カンタータ「脱出」等37公演に助成を行った。併せて原水禁の代表派遣や夏の友好祭にも助成を行った。

(つづく)

### 石岡市指定文化財(二十九) 兼平智恵子

・刈り込まれ笑顔消え去りさざんか

益々猛威をふるう新型コロナウイルス、見えない悪魔との闘い恐怖の毎日に、満面の笑みで元気を発してくれている山茶花のはな。

我が家のたつた四本の山茶花がまたしても、家人に刈り込まれてしまった。すっかり小さくなってしまった山茶花の葉陰から可愛い蕾がのぞいてる。

今回の文化財はぐるりと山々に囲まれ、田園風景の広がる広大な景色の中、瓦会地区(旧八郷町)の山中で清らかに上品に流れ落ちる滝のご案内です。

鳴滝(なるたき)

瓦谷三九一七―二九

名勝

平成十二・三・二九 指定

先ず、旧石岡にあります「ふれあいの里 ひまわり館」を左にして、車で出発しましょう。

間もなく十字の交差点を左折、「石岡市医師会病院」の看板を左にして前進、四、五分で二回目の信号のある十字路を越え前進、約二分程で右側に「やさど納豆工場」(地物の大豆で作られた豆が柔らかくとても美味しい)更に前進、約二分程で右側に「ギター文化館」(ギターの形をした建物?是非確かめて見て下さい)真向いには、経筒(経文が納められた筒)出土地の看板あり。

この街道は瓦谷街道の名で知られている。石岡市に国府が置かれた時代、国分僧寺、国分尼寺等の製造瓦を運んだとされている。

間もなく瓦谷街道とはお別れ、五差路右に下りていきます(新道と元の道路、二つの道路いずれも可)。

JR常磐線羽鳥駅発バス通りに出ます。左折し約四、五分で平沢停留所近く右折、此の角に鳴滝・瓦塚窯跡の看板と難台山ハイキングコース入口の看板があります。(この看板反対方向からくるととても良く目につく)間もなく道路左側に「瓦塚」の小さな看板、右折すると国分僧・尼寺等の屋根瓦等製造所だった瓦塚窯跡にいくことが出来ます。

曲がらず前進しましょう。右側に民家、左側に田畑。間もなく右側に数本のビニールハウス、通り過ぎると十字路、まっすぐ進むと団子岩峠へ、右折鳴滝への手作り看板。

右折してゆつくりと緩やかな上り坂を走らせる。

道路両側に大木の桜が現れて来るといよいよ鳴滝に近し、平沢停留所から七、八分で鳴滝駐車場に到着です。(車七、八台は止められます)

石岡市に合併する前の八郷町時代の趣のある看板

を滝の流れが奏でる水音を聞きながら読んで見ましよう。

「八郷八景の一つであるこの鳴滝は水量がすくないものの、急傾斜の岩上を数十mにわたって落下するもので、すばらしい景観を楽しめます。昔は大きな滝で天気の変わり目に変った音を出し天気予報の役目をはたしていました。」

岩石の橋（らしい）を渡るとベンチがあります。見上げると急傾斜の岩上を数十m、サラサラと清く流れ落ちる滝、心が洗われるようです。

訪れたのは十一月も終わりの頃で水量も少なく上品な流れに思わずマスクを外し、大きく大きく深呼吸、そしてスケッチする。

滝に祀られるのが多いとされている不動明王さまの祠も滝の落ち口近くに見上げることが出来ます。参道らしき手すり（一部心ない人が折り曲げてしまったのでしょいか無残お気を付けてください）のついた滝に沿った石段を上っていきますとお詣り出来ます。

最後になりましたが石岡市ホームページによりますと雨などにより水量が変わり、水量が豊富な、大雨の後などに雷が轟くような水音が聞えたため鳴滝と呼ばれた、とあります。

春には桜が咲き誇り、夏は涼しく、秋には紅葉、美しい筑波山を眺めながら、年間とうして楽しめる、鳴滝へお越しください。

しばしコロナウイルスの恐怖から逃れられます。



## 喜び、怒り、悲しみ、楽しさ 伊東弓子

玉里御留川を一周し終えた頃、各地のエピソードを書いてみては、と言われた。冊子とは別にまとめて作っては、という事になったが手掛ける迄に時間がかかって、さあ！七年前の出発の日に戻ってみよう、それが今となってしまった。

忍びすの森、深壺（ふかつぼ）、赤坂川（高崎地区）を歩いた時、「終戦直後の生活は大変だった。規則を守っているだけでは、喰っちゃいけないかったよ。人に言えねえような悪い事もいっぱいやったよ。」と、当時の苦しさを話してくれた。深壺辺りで溺れた人や子がいた。呪われた場所といわれてきたが、現代でも堤防が沈み、何度工事をしてる事か。

小宮川、赤坂川、塩くらを行く（高崎地区）

小漁場境に近くなる程、漁の諍いは多かった所。今も面影を多く残している地区だ。人家が少なくなる附近は粗大ごみの多い所となっている。

高浜は小漁場地域

大雨が降った後、駅の北東側にある踏切の水路には必ず鰻が何匹も上ってきたと、老人から聞いた。何処かでつながっているんだらうと、捕りに行く楽しさも語ってくれた。二十年前、義弟が、舟溜りや河口の掃除を始めた時、手伝うおうかと声をかけた。「人の所よりも自分達の所をやれよ」と言われた。その後、気にはしていても手付けずに過ぎ、ここ二三年私も真剣に取り組み出した。単なるごみ拾い作業だけではなく、故郷を愛する

気持が写真を撮って記録し人に訴えていく活動をしてきたことに頭が下がった。

大川崎、この辺りは高浜から長い距離、よく歩いた。御留川漁場で一番となっている。大元の恋瀬川の河口だ。屋敷跡の片付けをして男の人と話をした。那珂川からの導水事業にみんな反対していたのに、一人欠け、二人欠け、とうとう一人になって退かざるを得なくなると、残念そうな表情を燃えている灯りの中に見えた日があつた。

羽成子（三村地区）を行く

旧道に建っている道しるべの所で、ここを下りていくと漁場があつて、漁に行く人、帰って来る人で賑わつた。カーブの所の店も栄えていたという。韓国の娘さんの店があつた所へ私も寄つて、遠く「安山」へ行つた娘のことを忍びながら、ビビンバを食べた日があつた。

六兵衛川、松下川、浜却川は石川地区

好意的な区長、常会長さんに恵まれて、散らし作り、配り、公民館交渉をしていただいた。この地区で「親父達は偉かつたなあ。忙しい百姓仕事、漁仕事の合間に仲間作つて勉強してたよ。それに比べて俺達は、親父らの話も聞かず、自分達で歴史を知ろうとしてないもんな」と、申し訳なきさうに聞かせてくれた。

芦添川、御殿下川、木の下川（くらした）は井関地区

大きな農家の庭先で、当家のお婆さんらしい人と話をしていたら「そんな事、やってられねえよ。忙しく働きまわつてんだから……けんもほろろに



扱われた。「すまねえなあ」と、お婆さんは頭を下げてくれた。かえって申し訳ない気持だった。私が勝手につけた わらしべ長者の屋敷のある坂を降りた。川守宅と親戚だという大屋敷、塾生が学んでいた長屋門も未だに立派。農作業期の大型機械が並んでいる。奥さんは「全く男っていうのは仕様がねえ。新しい物好きで次々に買って、かんまわして大した仕事をした積りでいんだからね」と、冷やかす半分、自慢かなと聞いていた。山崎の森、八木の歴史もこの際、沢山学ぶ事ができた。

#### 五左衛門川（宍倉地区）

三ツ谷川岸の姿を残す二軒の古い屋敷が現存していて、その一軒には仲睦ましい夫婦がすっかり生活していた。何か安心した気持になって、また訪れることを約束して、そこを後にした。

#### ぬかり川、しん川、宮久保上川（高架津地区）

とても立派な水神様が舟溜りの傍らにあった。何処でもそうだったがなかなか人に会わない。庭先にいた男の人が、若い頃、堤防のない頃、家の畳まで水が来たっけよ。と話してくれた。反対側は大屋敷があった。人が感じられない・・・ただ風が通り過ぎていったような気持ちでむなししい。天狗党で活躍した家のご主人が河岸から醤油や味噌を土浦、江戸、東京、へ送ったと説明してくれた。さっさと歩く元気のよさには驚くばかりだった。

#### 宮久保下の川、柘下川【五衛門川、境川】

よた川、上田尻川（小津地区）

この地区は印象の強い所だった。池上先生の講演会の散らし配りの時寄った人が覚えていてくださった。奥さんが嫁に来たばかりの時、大井戸の方へ漁に行った旦那のことをおもしろい「早く帰ってこようばい」と、浜に立ったという。この辺り一帯の漁場では、水戸藩の運送舟の横暴にどれ程泣かされたかしのれない。文書が残っている部落はずれに大きな杉の木がある。この辺から北に向かって松並木があったとか。最後の一本が何年前前に倒れたという。富士山ならでは筑波の峰を北に見て、砂浜に寄せては返る波の音が聞こえてきそうだ。

#### 柘塚

小さな古墳が台地の前に存在感をしめしている。玉里御留川の目通しの印の場所、玉里側からはよく見える。逆に下玉里、稲荷の森は田が荒れて木々が伸びているせいで見通しが悪くなっている。こゝも「御留川」の看板を建てたいと思うが未だ声かけもしていない。

下田尻川、すさき川【前川】、よご入江川、天王下川、札場川（柏崎地区）

加工工場が何棟もあった。「浜との舟の行き来は、いろいろな人が来てくれたり、出かけて行った人が知らない話を沢山運んできてくれたけれど、あの事故は気の毒で喋ることの儘なんねえ思いだよ。」と、重い口調で話してくれた。栄えた町並みは母島のあの地区を思い出させてくれた。あの地区のように消えていかないよう願っている。

田伏はこんなに広いのかと、あらためて知った。

山の上まで続くお墓は、年若い人達にとつて辛いだろうと、我が身に置き換えて思った。

#### 大きき川、なみ川（田伏地区）

魚野川の奥さんは、この地で強く頑張っている人だった。遠い故郷の思いを大切にこの地で花開かせている。ほっと一息する所でもある。地元の人でお客の一人だった人が話をきいて散らし印刷、配布を協力してくださった。漁場の地名の一つがこの人の土地と重なるようだ。大橋を渡る時もみんな歩いての参加だった。この橋が御川筋の印と重なる。

#### 南須川（玉造地区）

大半が埋め立てられ現代の建物が続くが、広い水辺だったことだろう。江戸時代の庄屋さんが築いた堤の一部があった。心して歩いていった。霞ヶ浦の水質、漁、魚、堤防のことに力を注いだ浜田先生や仲間の人達の地味な活動は、確りと根付いている。沈んだ国分寺の鐘の音が、ゴーン、ゴーンと聞こえたとき高須の南側のお婆さんが、ゴーン、ゴーンと聞いたのは堤防が出来る前まで、と、梶無川寄りのお爺さんが話してくれた。玉造町中を行くと大場家がある。池上先生のご苦労と努力が今の大場家の姿だと思う。後継者も確り育った人達で、案内も説明も素晴らしかった。いつも快く迎えてくださる。

札場川、おかま川の二つは広い浜の両端になる所があった。

立派な古い寺が歴史を物語っている。この地区の人達何人かがやはり親切に下見の案内から関わってくれたのも有難かった。暖かい時間になると近くの婆さん達が集まるんだよと楽しそうだ。爺さ

んがいる人は来ねよ。ここに来るのは後家ばかりだよ、と大笑いしている。北の津頭のお宅も若い人はお勤め、お婆さんがまだまだ頑張っていないと、と弱音も吐かず、昔語りをしてくださった。

八木蒔に近い所におかま川の屋号の名をもつ家があった。男の人に会った。「男が昼間つからぶらぶら歩いていらねえなあ」という話をし、薄笑いしながら行ってしまった。とてもきちんとした地域だと感じながら、筑波山が近づいてきている。玉里も間近かと感じながら歩いた。

#### ざこ田川、こぶち川（しも川）羽生地区

若い日に尋ねた寺も、森も畔も其の儘むかえてくれたようで、懐かしい所だったが、寂れた家も多かったし、小学校もあつという間に壊されてしまっていた。ただ若い人が、土、日曜日に日光の自然氷を使って氷屋を始め賑わっているのには、嬉しかった。若者達が地域をつくってくれることを願う。

#### 沖洲地区

三味塚古墳の発掘にまつわる話し、資料を見せて頂いたり、苦労話を聞きながら、実行しようという意志や行動力、団結が動かした結果だと改めて思った。ほほえみの丘の風と昔懐かしい波の音、「みんな若かったから出来たんだよ」という一人一人の笑顔が目に焼きついていく。あの後、妹の孫と私の孫達を連れて遊びに行き、水の中で胸まで浸かってひとつきり遊んだ。帰ってから息子が娘に叱られたが、思い出を作った婆さん二人は満足、華やかだった芸術村も今はひっそりしていた。

#### 小川河岸、小川川尻（小川地区）

コースを広げ過ぎて時間がかかり、昼食を二か所に分けざるを得なかったこと等、リーダーとして私の失敗、その揚句、農道でそれも女の人に「さつさと曲ってよ」と、怒鳴られた。最後にきて大目玉を貰った。去って行く車に「そんなに腹立なくていいでしょう」と、怒鳴りかえしていた私、少し経って冷静さを取り戻す。御留川にしろされた最後の40番という場所でもある。

#### 川中子

この地区には漁場はないが、御留川、園部川の氾濫で悩まされ続けていた歴史の地区だ。どの家にも土間の梁に舟が置いてあつて、大水時の買物や学校へはそれで移動したという。

地元の石橋さん（役員）がとても詳しく案内してくれた。地区の外れた小藪があつた。小川で一杯引つ掛けて帰って来る男達が、必ずこの藪で寝込んでしまう話があつたという。狸か貉が女に化けて、吞兵衛たちを誘いこんだとか。

#### 十六日川（大井戸地区）は土の下

この辺一帯は御留川・川守宅にまつわる話、跡地の残っている地域、面影はなくなつたが漁民や家族、地域の人々、川守も含めて血の汗を流して歴史を重ねてきた所だ。

#### 稲荷の森

この場所と柵塚を結んだ線（目どおし）右の高浜入江が「玉里御留川」と呼び、左の現在の大橋まで御川筋と名付けられ、三百年近くの時を水戸藩の漁場として、制度が出来、地元漁民の生活は制

約を受けてきた。

#### 岩添（やぶくい川）、一ノ川を急ぐ

玉里半島といわれる出っ張り大井戸地区にある漁場、籠ぬけ地蔵がある。稗蔵が四棟あつた所、御蔵川岸として名が残っている。この辺りまで県道となつている。黄門さまの逸話なども残っているそう。

#### 渡場川をさがす

ここから八木の渡し場との間で舟が往来して、戦後も通つていたという話し。幾多の人を乗せ、荷物を積み、人生模様が織りなされたことだろう。

#### 下瀧川、瀧前川

ここ辺りから御留川の奥がよく目に入り、古代から権力者達もこの地を選んで生活し、勢力を誇示しその象徴として巨大古墳を造つていったのだろう。又新しい世を願つて封建時代を打破しようとした人達や芸術面で、故郷を表現した人も数多い。一周りしおえた今、七年もの時間が流れたことは、早いというか、その地域を尋ねた楽しさか、今満足感に満ちている。思えば鈴木家が大役を引き受け、一代一代の当主が努力されたのは勿論、江戸時代から明治にかけて最後の川守・源之允氏

がきちんと整理されて保存してあつたこと。この事実を舅であつた最後の源太左衛門氏が、息子のお嫁さんによく伝えて置いたことが、池上先生という専門的な研究者の目にとまり、そこから世に出ることが出来たと思つている。先生は常に漁民の苦しき、家族、地域の苦労、川守の辛さに確り耳を傾け、目を開いてみてほしい、と言つておら

れた。私達は一つでも二つでも成すことが出来た  
だろうかと、振り返っている。

さあさあいよいよまとめに入り、今後はどう歩  
いて行くか考えている時！



## 板橋不動尊

小林幸枝

板橋不動尊は茨城県つくばみらい市板橋にあ  
る真言宗豊山派のお寺です。一般的には「板橋  
不動尊」と呼ばれていますが、正式名称は清安山  
不動院願成寺です。

弘法大師(空海)が約1200年前に創建し、ご本尊  
の不動明王は弘法大師自ら彫刻したといわれており  
国指定の重要文化財となっています。

楼門は茨城県指定有形文化財、見るからに立派  
な門でした。建てられたのは1000年といわれ、真  
つ赤というよりも朱色で、とても美しい門です。

この楼門をくぐると右手側にこれも立派な三重  
塔が見えます。こちらも茨城県指定有形文化財で  
す。五重塔は聞いたことありますが、三重塔はあ  
まり耳にしません。どちらも、お釈迦様の遺骨を  
納める建物といわれています。建てられたのは  
1772年です。当時建設用の重機を使わずに塔を立

てるのはどれだけ大変だったでしょうか。きっと  
江戸時代の職人の研ぎ澄まされた感覚と技術があ  
ったんですね。

板橋不動尊の大本堂は1037年に建てられまし  
た。屋根が2つあり、珍しい構造です。二重屋根  
というそうで、暑さや雨水を避けることができる  
伝統の技術だそうです。

お堂の前に弘法大師(空海聖人)と2匹のお犬様  
の像があります。獅子・狛犬じゃなくて犬でした。  
犬の像はとっても珍しいですね。

このお寺は、お犬の伝統により安産、子育ての  
ご利益があるといわれています。みなさんも一度  
お参りしてみても如何でしょうか。

## 〈父のこと 27〉

菊地孝夫

はやいもので、師走となった。去年は、台風に  
よる水害で大騒ぎとなったけれど、今年はそれを  
遥かにうわまわってしまう「新型コロナウイルス」  
に明け暮れた一年だったと思う。連日のように、  
感染者の数字が報道される。

これはあのフクシマの「放射線の数値報道」と  
酷似しているようにみえる。

さまざま報道に振り回されて、人々は一喜一  
憂し、ありえないデマが連日のごとく飛び交った。  
コメンテーターが数多く登場し、数年のうちにな  
りながらも元に戻るようなことを語っていたけれ  
ど、廃炉一つとってもさっぱり進んだようには見  
えない。

あの「工程表」とやらはいったいどこに行っ  
てしまったんですかね？

現時点でも、放射性廃棄物は確実に増え続けて  
いるにもかかわらず、何を根拠にしたかわからな  
い、色分けした地図でもって候補地を選定して、  
どうやら北海道の町村に埋設場所を選んだようだ。  
手を上げた自治体は、10億か20億の交付金  
がもらえるということで、小さな自治体にとって  
は巨額な金額と言える。

わざわざそんな遠くを選ばなくても、現在の原  
発の敷地内に穴を掘ればよい。活断層が走ってい  
ないことになっているのだから、最適地であろう。  
輸送の手間暇もかからない。「地産地消」というわ  
けだ。

どうしてそうはしないのか、専門家のどなたか  
教えていただけませんか。

原稿の材料となるものは、このウイルス関連を  
探せば幾らでも見つかるけれど、いっこうに筆が  
すすまないのは、いったいどうしたことだろう  
か？

(少しでも明るい話題をと思って、締切過ぎま  
でねばってみたのだけれども・・・)

多くの人びとにとって、多かれ少なかれ価値観  
の変化を強いられた年だったのではないだろうか。  
なによりも生命の危機、生活の危機がさしせま  
って、日常生活の上でよい方へ変わった人は少な  
いだろうとおもう。

この石岡地方も、感染の広がりに伴って、安全  
なところではなくなってしまう。身近な誰かが  
感染しても、少しもおかしくない状態になってし  
まった。

一人一人にとって有効な予防手段も、さしあた

つては見当たらない。

有効なワクチンが具体化しそうだというニュースも飛び交っているが、副作用などは大丈夫なのか。

(製薬会社や、化学メーカーが過去にしてきた一連のことは見ると、到底もろ手を挙げて喜ぶ気にはなれないのは私だけでしょか。)

たとえ開発に成功してもそれが有効に効いてくるのは、早くても数年はかかると思うのだけれども。

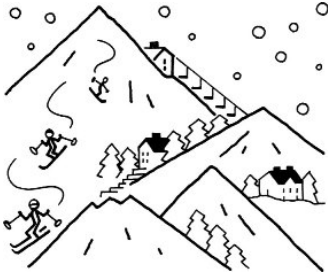
世界の現実の感染者数は、とつくに一億人をはるかに突破しているだろう。後進国では、検査体制すら十分ではないのだから、実際の感染者数の把握は、むずかしいだろうしね。

有効な治療法は、徐々に開発されてきてはいる。先端で頑張っている方たちの努力には頭が下がります。

悲観的な見通しを語っていてもしょうがないので、ここはひとつ来年に期待して筆を置きます。

(私個人にとっては、様々ないいことがあった一年でした。)

それでは皆様 良いお年を



## 風と共に 《理》

### 大輪啓展

#### 八 出合い (2)

新型コロナウイルスの新規感染は爆発的に増加しています。

重症患者の増加により、病院のベッド数、医療従事者への負担。

以前数ヶ月前にも聞いたような話です。

なぜ、一気に解決策へと導いて行かないのか、人類の歴史からも同じような事を繰り返さぬ様、学んでほしいものです。

兎に角、解決を人任せにするのではなく、人を責める前に自分はどうの様な事をすべきなのか、今一度振り返りを交えながらするべきでしょう。

さて、

今回は前回の続き、様々な出合いと其れにまつわる e t c でした。

出合いは突然で、自分の起こした行動やその場の思考が大きくそこに変化をもたらします。

自分が成長出来る、尊敬出来る、切磋琢磨出来る。そんな人との出合いについては、温めて行かなければなりません。

とはいえ、そんな状況など時が経ちはじめて理解できる事であり、どんな人との出合いが自分の人生に、重要な要素をもたらすかなどすぐには気がつかないものです。

ここで重要になってくるのは、自分の直感・或いは第六感などと呼ばれるものです。

直感とはすなわち、自分の生きてきた中で体験を基に、五感を使って即座に答えを導く事である。

第六感とは、五感では感じ取れなくても、心がざわつく一種のオカルト的、或いは神秘的な自分自身の奥底にあるなにかである。

と思っっていますので、自分のこれからの必要になる出合いの、最初の印象は良くても悪くても強烈に自身の記憶に残りやすいと、そんな風に思う訳です。

ですから、そんな感覚を少しでも覚えたのならば、自ら勝手でもその感覚が本物なのか確かめねばなりません。1ヶ月後なのか10年後なのか、はたしてその出合いはどちらに転ぶのでしょうか。

そんな事を経て、出会えた一握りの大切な人達との今後については、皆様方がそれぞれで少しずつ育んで行かれるでしょう。

ですが、自分にとって良い重要な出合いだとしても、順風満帆に行くとは限りませんし、時には仲違いがあったり、心無いやり取りですら起こる事もあるかも知れません。それでもきつと切っても切れない縁で結び付いていけば、やがて時と共に自然とまた一緒にいられる空間ができてくるのでは無いかと思っっています。

様々な関係性の中で、影響しあい成長しあい、ガムシヤラに走ったり、時には立ち止まったり、しっかりと地に足付けて、急ぎ過ぎず、かと言

って怠け過ぎず、良い塩梅で人生を進めて行けたらな、と思います。

私自身も、大切な人達との日々の中で、小さな事に喜び、幸せを感じる、些細な幸せの積み重ねこそ、大きな幸せ・得難い人生の醍醐味では無いかと感じております。

不思議なものです。

心にゆとりのある生活こそが、全てを良い方向へと導いてくれている気がしてなりません。

大事なんですよね、そういう1つ1つが。

1つの出来事を、どんな風に感じとるのか、そんな事から見つめ直し、新たな発想と共に実りある毎日を送る事、簡単そうで中々出来ない、そんな所を今一度考え直してみるのも、ゆとりある日々の第一歩となるかもしれません。

試してみるのには誰でも出来ますから、一歩踏み出す心を持って、

いざ参らん。

この続きは、次月とさせて頂きます。

内容は全て私の主観です。



## 【風の談話室】

### 《読者投稿》

やさと暮らし(46)

やさと女

11月に入って晴れの日が続いている、低い温度と乾燥は感染症の流行が心配だが、今年豊作の干し柿には最高の条件。

・果てしなく続く青空、そして何とも美しい夕焼け。八郷の有明広場でクラフトフェアが開催、いつもよりテント数が少なかったものの大勢のお客様で賑わっていた。その後ブックカフェ“えんじゅ”へ顔を出す、そこで家宝をゲットした。我が家もウン10万？もする抹茶碗をとうとう手に入る事が出来た。煤竹の花入れも手に入れ、こちらは竹の師匠に再現してもらおうと思う。

・少し肌寒いが心地よい快晴の日。イチゴ屋さんからの声掛けで秋の遠足。イチゴ屋さん夫婦は、せんぶり【苦い健胃剤】が常備薬。それが無くなり、つくばの問屋さんに買いに行くので、そのついでに彼方此方回ろうということになった。問屋さんでせんぶりを買い、産総研の地質標本館を見学、その後海鮮市場で海鮮丼を食べ、市場の社長宅の庭に感動して帰ってきた。お土産に魚を沢山いただき夕食は久しぶりにアジのたたきなど作り美味しく頂いた。

・カラッとした青空が続く別の日、友人のイチゴ屋さん仲間が集合。イチゴハウスのビニール張

替や周辺の片付け。毎年夫婦2人で何日もかけてやっていたが、今年は8人の仲間の力を結集・・・多人数の力は凄く、おかげで3時頃には終了。辺りの山々の紅葉はすすみ、作業のなんと気持ちのいい事。またみんなで食べるお昼の美味しい事。御主人も80歳をとうに過ぎた。大変な時は何時でも来るよ、みんなの優しい事。美味しいイチゴは、白い花を咲かせ始めた。

・快晴の日、我が家の片隅に立っている1本の渋柿、戦中戦後は疎開してきた子供達が競って食べたという熟し柿。渋柿も熟すと上品な甘さになる、お腹を空かした子供達には美味しいおやつだったと思う。今年は豊作、柿酢もたくさん作った。干し柿作りはもともと寒くなってきたからがいいのだが、既に熟して、ぼたぼた落ちてきている。時期は早いと思うが、干し柿作りをはじめた。乾燥した寒い日が続くといいいのですが・・・。

・八郷はオレンジ色に染まっている。11月に入り富有柿の美味しい季節になった。そんな柿畑の間を今日も散歩・・・。3キロ程歩いた時、知人が柿畑で休憩していた。挨拶すると柿あるのかと声がかかり、持てるだけ持っていけ・・・と、急遽散歩から柿狩りに変更、2人で持てるだけの柿をもぎ帰ってきた。

・荒れた畑から大量の細い竹、畑も数年放置すると大変な状態になる。今回元の畑にするのに重機を入れ畑に戻したご近所さん、その竹をいくら持って行ってもいいよと言う。我が家では30本ほどもってきて、つるバラの棚を作った。それを聞いて

た友人夫婦も30本位、軽トラに積んで帰った。今日は素晴らしい青空、山を背にしての作業、楽しかった。

・青空と暖かさに誘われて、今日の散策は隣の集落にある鳴滝。滝を見ながら、急な岩を登り山を少し歩いて見た。帰りは足を滑らせないように、気をつけながら一歩一歩……。昨年？の台風被害も所々残っていたが、地元の有志が大分整備した様です。山も大分紅葉が進んできました。

・園部地区公民館主催の歴史散策。水戸の偕楽園、好文亭、ドライブインでの昼食、買い物、そして弘道館。近い所ながら、初めて見学する方もいたようです。行ったことがあっても、ゆっくり見学した事のないばかり……。真つ盛り紅葉に思わず「きれいだね！」の連発。弘道館は来年の三日月大河ドラマの舞台にも、先日もロケが行われたそうです。ただ、コロナ騒動の中、バスの中も昼食も無言、離れて座り、少し寂しいツアーだった。

・ある日の事、早朝6時ゴミ出しに出ると東の空が真っ赤に燃えている、そして彼方此方の空が段々にピンクっぽく染まり刻々と変化、暫く見とれていた。すると突然夫が、空見てみる、珍しいなというので指さした方を見ると、西の空から北に向かつて大きな虹が、だんだんとはっきりとした色が出てきた。それにしてもこんな早朝に虹を見たのは初めて。

・ブックカフェ“えんじゅ”での薩摩琵琶の会、深まる晩秋の里山に佇む古民家。いつもはひっそ

りとした場所なのにこの日は何台もの車が往来、夕やみ迫る頃に琵琶の音色が響き渡る。琵琶の優雅な音色と語りに、とても贅沢な時間を頂いた。古民家の庭には、オーナーさんの心遣いで小さなマルシェも開催され、私たちのエコクラブトサークルのエコバックも置いてあり、何人ものお客様に買って貰った。ほんとうに有難うございました。



## 師走に

燕石（えんせき）

やはりというか、当然というか、GOTOキャンペーンはその欠陥が顕著になってしまおうということが千々万々なことになる。

結論から言えば、最悪のタイミングでもって人々の移動を促してしまつて、ウイルスをこの国の隅々までばらまいて、いたずらに感染者を増やす効果しかなかった。

（一部関係業界は、これによって確かに潤ったろうけれどもね。）

気温が低下して、乾燥季に入れば、こういったウイルスが増殖する環境になるのはきわめて当たり前のことだろう。

患者数の増加は、右肩上がりのベクトルになっていて今日の時点でも終息の気配すら見えないでいる。公的な数字でも都会の大都市では、300人に一人の感染者、が報告されている。

そして、例によって感染者に対する、いわれなき誹謗中傷があつて、それを恐れるあまり、PCR検査を拒否する動きもある。これによって感染者が見えなくなつてしまふ。誰だつてバッシングにさらされたくはないだろう。それに対して、罰則規定を設けようとしている。

昔の隣組に見られたような、相互監視の社会、何事も同一の価値観でなければ受け入れない狭量な社会。

昔々、さしたる根拠もなく、強敵に挑んで、無残に敗れ去つた過去があるというのに。かつてのこの国の指導者層と、今日のこの国の指導者層とが重なつて見える。

不確かな、希望的観測を幾ら積み上げても、未来を変えることなどはできはしない。経済効果を考えたと言いつつ、誤るだらうけれども、これによつてその付けを負わされた医療関係者たちにとつては、もつてのほかというしかないだろう。

東京都では「三ミツ」のあとには「一五小」だとかいう話だけれども、そのあとは、「七何とか一」になるといふわけか。

いきあたりばつたりのスローガンだけ称えていても、問題は一向に解決しはしない。

この次は都庁をライトアップして何色に光らせるのだろうか。それとも、七色の煙の尾を引くジェット機を飛ばすのか。

今の知事さんたちは、パフォーマンスだけは感心するほどうまい。  
何も事が起こっていない時ならば、それでもよかつたろうけれどもこの事態に至ってもまだそんなことをやっている。

いつまでも個々人の努力だけに頼っているのはダメだろう。

未来のことが何一つ見えない時、言葉はちからを失う。

画期的な予防法、治療法、ワクチンの出現を待つしかないのか。それとも、時がたつて自然の終息を待つしかないのか。

良いお年を・・・

## 茨城県の難読地名とその由来(9)

木村進

### 弓弦【ゆづり】 石岡市(旧八郷町)

「八郷の地名」(八郷町教育委員会編)によれば、弓弦を「ユヅリ」と読む例は極めて珍しく、地名の由来についてはさだかではないが、古老の言によれば、日本武尊が東征の際この地で弓の弦を張り替えたことによる命名という。

地形語としては「ユズル」から地滑りの起きやすい地形で、崩壊地形・急傾斜の多い処などの地形語という。数多い小字名には、伝説地名や信仰対

象地名が多いのも特色の一つである。

字地獄入には、伝説の浅間神社があり、字寶蔵寺境内は禅宗廣澤山寶蔵寺である。

廃寺東福院は字元福院屋敷付にあったといい、小さな村落なのにいくつかの寺社が存在していたのも珍しい地域といえる。と書かれています。

確かに今の全国の郵便番号地名には「弓弦」という地名は出てこない。

今の7ケタ郵便番号簿はほとんど小字名が消えてしまっているのです、地名の由来などを検証するのは難しい。

この八郷地区の弓弦の地名については、地元の話でも、このヤマトタケルが弓の弦を張り替えたからという伝説しか出てこない。

ヤマトタケルの伝説はこの石岡・八郷地区にもたくさんある。

住所として「ゆづり」という読みの地名が他にないかどうかを調べてみた。

### 岡山県赤磐市由津里(ゆづり)

があった。この赤磐市由津里にはかなり古い神社「片山神社」が鎮座していた。

この神社を調べると、

「本神社の創建は孝靈天皇の御宇七十二年に、吉備若日子建王子が播磨を征せられた時に、籠もつて祈り給うた。天平二年(七三〇)九月一日に建替、

永承四年(一〇四九)に神社仏舎利納めのときに、峰から麓に遷座した。片山大明神と称し、正三位の神位を贈られた。延喜式赤坂之部鴨三社の一で、明治三年三月に郷社となった」(岡山県神社庁)とある。

日本書紀によると、第10代崇神天皇の時代(3世紀頃?)、四道將軍(しどうしようぐん…4人)が、北陸、東海、西道、丹波へ派遣されて、その地の征服を行った。

四道將軍の一人、第7代孝靈天皇の皇子である「吉備津彦命(きびつひこのみこと)」「(吉備津日子命)(一説では桃太郎伝説のモデル)が吉備国(岡山県)を平定するために出陣した。この吉備津彦命の弟が「吉備若日子建王子」という。

この「吉備若日子建王子」は播磨を征服するために出かけるが、その時に、この神社の場所に籠って勝利祈願をしたという。

さて、ただ「由津里(ゆづり)」という地名の由来は見つからない。

この岡山県の由津里と、石岡の弓弦の共通点は? この八郷地区にはヤマトタケル伝説も多いが、柿岡の丸山古墳は豊城入彦命(とよきいりひこのみこと)の奥津城(墓)だとも言われている。また佐志能神社(石岡に3社ある)にこの豊城入彦命が祀られている。

しかし、ヤマト朝廷がこの地を征圧したのは時代的に少し後のようで、恐らく豊城入彦命の意思を

引き継いだ彼の子孫ではないかと感じている。関東・東北地方には豊城入彦命が神格化された話が多く残されている。

両者の共通点を漠然と想像するとこの「ゆづり」は「譲り」ではないかという様な気もする。

地形説も確かにあるが、この地には昔から信仰心が強いというのも何か気になるところだ。

## 安居【あご】 笠間市（旧岩間町）

この安居（あご）は、延喜式に載っている古代官道の駅家（うまや）の「安侯（あご）」が置かれていた場所だと考えられている。

10世紀初期に書かれた延喜式には神社名などのほかに古東海道の駅家（うまや）や東山道の駅家（うまや）の駅名が載せられている。また古東海道の終点である常陸国国府（現石岡）からさらに北上し、東山道と連絡すると思われる街道の駅名が記されている。

（古東海道）常陸国府 ↓ 安侯 ↓ 河内（水戸市）  
↓ 田後 ↓ 山田 ↓ 雄薩 ↓ 高野（福島県矢祭町高野） ↓ 長有 ↓ 松田（東山道）

この駅家は16 km間隔にあり、馬を常駐していた。現在石岡の鹿の子から常磐高速に沿った旧官道の跡が見つかっており、この安侯駅家は 安居（あご）地区の常磐高速沿いの地点がその跡だと考えられている。

延喜式の記載の前にはこの「安侯」駅家は、日本後記に812年に安侯、河内、石橋、助川、藻嶋、棚嶋の6駅が廃止されたことも記されているため、一度廃止されたものが延喜式【927年】では復活している（安侯馬二疋の記述有）事になります。平安時代には「安侯郷（あごこう）」という地名が「和名抄」に記載されているので、「安居（あご）」の地名はこの「安侯（あご）」から来していると考えられますが、何時どのように変わったものかはわかりません。

全国の「安居」という地名を調べてみました。

「安居地名一覧」

★ アゴ の読み

茨城県笠間市安居（あご）

静岡県静岡市駿河区安居（あご）

静岡県富士宮市安居山（あごやま）

和歌山県西牟婁郡白浜町安居（あご）

★ アンゴ の読み

京都府八幡市内里安居芝（あんごしば）

京都府八幡市八幡安居塚（あんごづか）

★ その他 の読み

岩手県遠野市附馬牛町安居台（あおだい）

富山県南砺市安居（やすい）

愛媛県松山市安居島（あいじま）

高知県吾川郡仁淀川町土居（安居土居）

（やすいどい）

福岡県久留米市山川安居野（あいの）

この中で読みが「あご」と「あんご」に注目して

みよう。まず、京都府八幡市の安居（あんご）だが、これはおそらく「安居Ⅱあんご」は僧侶たちが一定期間、庵に籠って修行することを安居（あんご）といった言葉が地名になったと思われる。梅雨時など雨季に草木が生え繁り、昆虫、蛇などの数多くの小動物が活動するために、この時期には外を歩いてむやみな殺生をしないように、庵に籠って修行したことに始まるといわれています。こちらは一般的には「あんご」と読ませていますので、この「あご」とは少し違っているように思える。

アゴⅡ網子 で網を操る漁師の集団が住んだところ という解釈があるようだが、この茨城県の安居は現在の地形ではイメージはわきないが、昔は涸沼川が近くをながれ、蛇行しているような場所で川での漁が盛んなところから名前が付いた可能性もありそうだ。

同じ「安居」を「あご」と読む和歌山の「安居」も日置川の川が大きく蛇行している開けた場所なので、これは「網子」か？

一方静岡市の安居は久能山の麓の海岸寄りであり「僧侶の安居（あんご）」「海岸での漁師の網子」の両方が考えられます。富士宮市の「安居山」は身延線沿線の比較的山の多い地域です。こちらは僧侶がこのあたりの山に籠ったのでしょうか。笠間の安居にも「千日堂」などもあり、信仰も盛んな場所だったと思われるので、いろいろな解釈もできそうです。



## 畑田【かまた】 鎌田市

畑田【かまた】という地名は現在の郵便番号簿には他に出てきません。

また「畑」という漢字はあまり見かけませんが、「畑」煙」で、畑る」けむる、けぶると読み、音でも「えん」としか辞書には出てきません。どうしてこの漢字で「かまた」と読むのでしょうか？

角川の日本地名大辞典によれば「北浦に注ぐ巴川河口東部に位置する。縄文中・後期の畑田貝塚や寺前古墳がある。」となっており、この「畑田村」の地名は鎌倉期にすでにみられるという。

また、常陸（平氏）大掾氏の一族である鹿島氏の祖、成幹の子の親幹が徳宿郷に拠点をもち、親幹の子である秀幹が徳宿秀幹を名乗り、その子の朝秀が、畑田・大和田・富田・生井沢の4か村を譲られて、畑田（かまた）氏を名乗っています（13世紀）。

そのため、すでに13世紀には「畑田村」があり、「かまた」と読んでいたことがわかります。

ただ、平凡社の「茨城県の地名」にはこの鎌倉期の村の名前は「鎌田村」と書かれており、ここを畑田氏が支配しており、畑田城があったとなっています。

仮設ですが、鎌田村が元々あって、そこを支配し

た鹿島氏の一族である徳宿朝秀が「畑田朝秀」と書いて、畑田（かまた）氏となり、地名も「畑田村」と書かれるようになったのかもしれない。

「畑田」という漢字の意味は「煙るような土地、霞がかかった土地」というような意味合いがありますので、田畑によく霞がかかるような土地だったのでしょうか。

元の「鎌田」や「蒲田」という名前は、各地にたくさんあり、地名の由来も、「泥深い田地、湧水がある窪地地帯」というような地形説が強いようです。

### 常陸旧地考（6）

#### 菊地孝夫

○茨城（うばらき）

和名鈔に茨城郡茨城郷あり、風土記細注に、いわゆる茨城郡は今那珂郡の西に在り、古くは郡家置くところ即ち茨城郡の内云々とあり。

國誌には、今按ずるに府中、新治郡に属すと見えたり。今の府中村、いにしへの茨城郷なること疑いなし。府中の地内に茨城と謂う小名有、これと名のわずかに片隅に残つて、後の名の府中と言えるが広がって、大きい名となり、茨城は府中の地内の小名となるなり。この類い諸國に多い。

和名鈔に、いわゆる國府茨城とあつて、府中なること疑いなし。

今は新治郡に属したれども、古は茨城郡なること、今に里人も言い伝え、また風土記の趣にても明らか

かなり。

さてこの地に、尼寺が原と言える地在り、いまは田に鋤きてあるが、所々の礎残りこれあり、また瓦を掘り出す事あり。國分尼寺の跡なりと云い伝う。國分寺は僧寺。僧寺と尼寺と諸國に建てられし事、古書に見える。

またこのところに國分町あり、里人コクボと称えり。またここには國分寺と云ういささかな寺が有り、これはいにしへの國分寺の名残りなり。

彼是を以て、茨城の國府なること疑いなし  
\*これが現在の石岡市、旧府中平村を國府のあつたところとする根拠となつてゐる。

○田余（たまり）

和名鈔に茨城郡田余郷あり、今の本に、田舎とあるは誤り也。

風土記に田餘とありこれなり。郡の中に今あるところを知らず。

新治郡に浪逆浦にそえて玉里村在り、このあたり、茨城郡なることは疑いなし。故に、この玉里村が田余郷でありける。

風土記の茨城条に、郡東十里桑原岳、昔、倭武天皇、岳上に留まり、御膳捧げ奉られた時、水部に命じ、新たに清い井掘らせ、出た泉は、浄香、飲喫尤も好く、勅して

「良き清水かな（俗にいう、よくたまれるみずかな）」

これによつて名を田餘という、云々。

○小見（おみ）

和名鈔に茨城郡小見郷あり、郡の中に今あるところを知らず。

國誌に、小見今新治郡に属すと見える。今なお新治郡に属して、小見村有。上の山崎村、次の林村の西にて、茨城郡の地に近い、これなり。

○拜師(はいし)

和名鈔に茨城郡拜師郷あり、郡の中に今あるところを知らず。

國誌に、拜師、今按ずるに上下林新治郡に属すと見えたり。今なお新治郡に上林、下林村在り、上の山崎村小見村に近い、これなり。

さて拜師という地は国々に多い、出雲風土記茨城郡条に拜師郷、郡家の真西二十一里二百十歩、所造天下大神命、越八口を平らげようとした時に、

このところの樹、林繁り、そのときのりたまわく「わが御心のはやし」とのりたまいき故、林という(神龜三年(726)字、拜師と改める。即ち正倉あり云々。

和名鈔に山城国紀伊郡拜師(はいし) 加賀国石川郡拜師(はやし) 讃岐国山田郡拜師(はやし) 備中国小田郡拜師(はやし)など

り、山城国拜師の訓注に波以之とあるは、音便なり、  
\*出雲風土記に茨城郡条となっているが、意宇郡(おうぐん)の誤り。

○石間(いはま)

和名鈔に茨城郡石間郷あり、今の岩間村これ也。國誌に、今、上下石間と見える。

○安饒(あしか)

和名鈔に茨城郡安饒郷あり、郡の中に今あるところを知らず。

或いはいう、新治郡の安食村これ也。安饒、國誌に、阿志賀と訓注あり。またアジカとアジキと通音なり、これなるべし。

○白川(しらかわ)

和名鈔に茨城郡白川郷あり、郡の中に今あるところを知らず。

\*現在の茨城郡内に白川の地名があり、明治初期の地図などにもあつて、この条が所在不明となつていのはなぜか、疑問が残る。

○安(あ)侯(ご)

和名鈔に茨城郡安侯郷あり、國誌に、安侯(あご)と有り、今なお安居村在り、これなり。里の人は、このあたりの村々にかけて、アングウノ郷と云う。日本後紀に、弘仁三年(812) 条十月癸丑、常陸國安侯、河内、石橋、助川、藻嶋、棚嶋六驛とあり、いにしへの驛家なり。

○大津(おほつ)

和名鈔に茨城郡大津郷あり、郡の中に今あるところを知らず。

○立花(たちはな)

和名鈔に茨城郡立花郷あり、郡の中に今あるところを知らず。

東鑑に、常陸国橋郷をもつて鹿嶋社に奉ると見える。

東鑑…吾妻鏡、あずまかがみ。鎌倉末期編纂の鎌倉年代記。

○田(た)籠(こ)

和名鈔に茨城郡白川郷あり、國誌に太古と訓注せり。郡の中に今あるところを知らず。

○提賀(てか)

和名鈔に行方郡提賀郷あり、國誌に、提賀はいまの手賀と見えたり。今なお手賀村在りこれ也。

風土記の行方郡の条に郡の西北提賀里は古く、佐伯在り、手鹿という名なり。その人のいたため、追つて、里につく、云々。

○小高(おたか)

和名鈔に行方郡小高郷あり、今なお小高村在り、國誌に、小高(こたか)と訓注したるは誤りなり。風土記に男高とある。同所にてヲダカなること疑いなし。

風土記の行方郡の条に、男高の里、古くは佐伯在り。小高その居る所のため彼の国の名なす、云々。

○藝津(きつ)

和名鈔に行方郡藝津郷あり、郡の中に今あるところを知らず。

風土記の行方郡の条に、藝津里古く、国栖あり、名を寸津毗古、寸津毗賣。二人天皇の御幸に当り、命に違ひ背きしこと甚だしく、いやまれここに御劍受けたちまち斬滅云々

寸津毗古…きづひこ。不明

寸津毗賣…きづひめ。不明  
\*寸をきと読むのは、いかがなものか？

○大生(おほぶ)  
和名鈔に、行方郡大生郷あり、今なお大生村在りこれなり。

風土記の行方郡の条に、相鹿大生里、古老曰く倭武天皇相鹿丘前宮に坐し、この時膳屋を構え、立浦浜に船を編み、橋を作り、御在所を通す。大炊の義を取り、大生之村と名付けたり云々とあり。さて、今かんがうるに、相鹿・大生はもとひとつの地なのを、後に二つに分かれたりに見える。それは風土記の趣、相鹿丘前宮は相鹿のちに宮作りしてここにて御食奉りしにより、大炊の義を取り、大生と名付けし由なり。

さて、のちに相鹿と大生と二郷に分かれたるなり。和名鈔のころは、すでに二郷なるゆえ、大生逢鹿と並べ揚げた。

いま大生村と大賀村近いことにも、知るべし。

大炊…おおい

○當麻(たいま)  
和名鈔に行方郡當麻郷あり、今の本に、當鹿とあるは誤り也。

風土記に當麻郷とありこれなり、郡の中に今あるところを知らず。  
いま按ずるに鹿島郡に属して、行方郡近く當間村在りこれなるべし。當麻をトウマと訛り対に當間と書き換えたるもの成るべし。

さて當麻は、和名鈔に、大和國葛城下郡當麻郷あり、これはことに名高い地にて、今なお當麻寺有、

これにより、タイマと読むべし、タイマは音便にて本語は、タギマなり。

風土記の行方郡の条に、當麻郷、古老曰く、倭武天皇、巡行しここ、この郷を過ぎて、佐伯の名を鳥日子という。その逆らう縁を、命、便に従い攻略、屋形野ノ飯宮に、ゆきまして車駕経る所の道狭く、深淺、悪しき道の義、これ當麻という。「俗に云うたたきし」云々とありこれ、當麻と言え由のものとなり。たたきしは、たぎたぎしの往古の書き様なり。

古事記に、當藝野上に到りし之時にのり給えるは、吾心、つねに我も虚しく翔けゆかんと思いつるを、いまわが足の歩みえず、タギシの形になりたり、云々とある。

タギシは艇にて、船漕ぐ道具なり。  
このタギシのかたち似たるを持て、斯くはたまえるなり。

されば風土記のタギタギしもこれにて、道地深淺にて速やかに歩行できぬのもつて、この地の名におうせたるよしなり。

○逢(あふ)鹿(か)  
和名鈔に行方郡逢鹿郷あり、郡の中に今あるところを知らず。

國誌に逢鹿いまの大賀と見える。今なお大賀村在りこれ成ること大生の条にいえるが如し。アフとオホは音ちかし。

風土記の行方郡の条に、倭武天皇相鹿丘前宮に坐し云々、大橋比賣命、倭より降り来たりし時、この地を過ぎ、故、安布賀邑という云々。

○井上(いのうへ)

和名鈔に行方郡井上郷あり、今なお井上村在り、これなること論なし。

○高家(たけへ)  
和名鈔に行方郡高家郷あり、郡の中に今あるところを知らず。

今の本に、高家をカキへと点したるは誤りなり。これによって、國誌も加木倍と訓注している。高家というは和名鈔に美濃國不破郡、下野國都賀郡などの高家をもカキへと点している。みな誤り也。

信濃國安曇郡高家(たきべ)越後國三島郡高家(たかや)佐渡國雑太郡高家(たかべ)と訓注あるにより、タケへと訓むべし。し鹿嶋郡にも高家郷あり。あるいは、今の武田村なりといえる。

○麻生(あさぶ)  
和名鈔に行方郡麻生郷あり、郡の中に今あるところを知らず。

風土記の行方郡の条に、麻生里古昔渚之岸に周圍大竹のごとく、長さ一丈余りの山あり。榎、栗、槻、櫟、生い茂り猪、猴(さる)、棲めり云々。

○八代(やつしろ)  
和名鈔に、行方郡八代郷あり。郡の中に今あるところを知らず。

國誌に八代(やつしろ)とのみあり、その地を言わねば当時早く廢れて知られず。

○香澄(かすみ)  
和名鈔に、行方郡香澄郷あり。郡の中に今あるところを知らず。

國誌に香澄（かすみ俗に霞とつくる）とのみありて有無を言わず。

風土記行方郡の条に、郡東二十里、香澄里。古伝に曰く、大足日子天皇、下総国印波鳥見之丘に登りまして、つたよい遙かに望み東を省み給いて、伴人にのりして曰く、「海は即ち青波漂い、陸はこれ霞たなびき、國中にある。朕が目に見えるところなり。」

〔當〕時の人これを以て霞の郷という、云々。

高田與清は鹿嶋日記に、小宮山昌秀の説として、行方郡富田村の地内にカスミという地名有。香澄郷なるべしという。これにより、その里人は今なおこの地に霞の台というところを在り、其のところ、霞稻荷の社ましますという。（続く）



### 【特別企画】

#### 打田昇三の太平記（4）巻第二・2

#### ○ 俊基朝臣再関東下向の事

後醍醐天皇の側近である俊基朝臣こと藏人右少辨・日野俊基は先に土岐十郎頼貞が討たれた際に捕らえられて鎌倉まで連行された。あれこれと厳しい尋問を受けたけれども上手く答弁をして何と

か赦免をされ後醍醐天皇の許に戻って来ていた。しかし、他の者の自白などから、倒幕の企てに深く関与しているのは天皇と俊基であることが分かってきたから、幕府も目こぼしはしてくれない。

文観・圓観らが捕らえられた際に陰謀の主犯格として認定されたから元弘元年（一三三一）七月に再逮捕されて鎌倉へ送られた。今はどうか知らないが当時は「再犯は赦さない」とする厳正な法律があつたようで、如何なる弁解も無効であり護送途中で斬られるか、鎌倉で斬られるかの二択しか無いと覚悟するしかなかった。

道中で脳裏に浮かぶのは京の都の春夏秋冬であり、残して来た妻子のことであるが自分の身が危ない現状ではどうする事も出来ない。護送される途中にも大坂南部・逢坂の関、琵琶湖湖岸にある打出の濱、長良川沿い関の町など歌に謳われた古来の名所旧跡は多いけれども、その様なことに心を止める余裕も無く、鏡の山と言う名山・旧跡の風景も涙に曇って見分けがつかない。

不破の関（関が原）、尾張、熱田、遠江と護送されて天龍川岸の池田宿（浜松市東部）に着いた。かつて元暦元年の頃に、源平の合戦に敗れて東国の武士に捕らえられ鎌倉へ連行される平重衡中将

（清盛の子、東大寺焼き打ちの責任を問われ僧兵の要求により護送途中で殺害された）が、此の宿場で長者の娘が詠んだ歌に心を慰められた故事を思い出せば今は我が身と、涙するばかりである。

「宿場の灯りも幽（かす）かに、鶏鳴曉を催せば馬も風に嘶（いな）ない）いて」と原文にあるから強行軍で宿場に泊まらず鎌倉へ向かったらしい。

天竜川を渡り、小夜の中山（左右に深い谷の有る坂Ⅱ東海道の名所）を越えて行けば薄雲（霧）

が街道を埋めて寂しいだけで有り其の昔、西行法師（平安末期の歌人）が歌に残して二度までも越えたという故事が羨ましく思われる。

年たけてまた越ゆべしと思ひきや

命（いのち）なりけり佐夜の中山

難所を越えて平坦な道になりスピードを速めて進んだ。「日すでに亭午に昇れば餉（かれひ）進（ま）いら）する程に：」昼時になったので弁当の差し入れがあつたらしい。囚人なので贅沢は言えない。街道沿いの家を借りて護送車（輿）を止めた。

すると俊基が中から輿の柄を叩いて警護の武士を呼び「此処は何処か？」と訊ねたので「菊川です」と答えたところ、俊基は承久の乱（後鳥羽上皇らが幕府転覆を企んで失敗した事件）に際して鎌倉へ召喚された上皇近臣の藤原光親が此の場所で殺害されたことを思い出した。

其の時に光親は「昔は南陽県の菊水、下流を汲んで齡（よわい）を延ぶ、今は東海道の菊河、西岸に宿つて命を終わる」と、中国の故事に因んだ遺言を残している。今は自分が藤原光親と同じ様な立場に置かれているので絶望的な気持ちになり辞世の歌を民家の柱に書き残した。

古（いにしえ）もかかるためしを菊川の

同じ流れに身をや沈めん

大井川を渡れば、都に居た頃に龜山天皇の行幸を得て嵐山に花の盛りを愛で詩歌管弦の宴に参列したことを思い出して、今や二度と其の様なことはいない身になった現実を悟るばかりである。都では庶民の苦難を余所に天皇の周辺で贅沢をしていたのであるからバチが当たるのも当然だが。

一行が島田、藤枝を過ぎて岡邊の宿を通る頃は日も暮れ掛かり名所で知られた真葛も裏枯れて何

と無く物悲しい。難所で知られた宇津ノ谷峠を越えて行けば道を塞ぐほどに葛や楓が生い茂り何処が道かも分らない。其の昔、業平の中将（平城天皇の孫・歌人の在原業平ありわらのなりひら）が理想の住居を求めようと東の方に旅に出て「夢にも人に逢わぬなりけり（人の姿を見掛けない）」と歌を詠んだのも道理であると思ひ知らされた。

入江越しに三保ノ松原を見ながら清見瀉（静岡市興津付近）を通れば浜辺に打ち寄せる波が関守の様に都に帰れる夢も希望も消そうとする。更に富士の高嶺が見えるようになると薄煙が僅かな希望さえも断ち切るように雪の中に立ち昇る。足柄山の峠から大磯、小磯を見下ろし急ぐ旅では無かつたが、七月二十六日の夕刻には鎌倉に着き、南条左衛門直高から諏訪左衛門に渡され、嚴重な座敷牢に押し込まれた。都では天皇側近の公家として権威を誇っていた身であるが今は重罪人として監禁され、さながら地獄の罪人が閻魔王に責められるような状態に置かれてしまった。

### ○長崎新左衛門尉意見の事、付阿新殿の事

左衛門尉（さえもんじょう）は六位相当の官職であるが、新左衛門は新旧の区分では無く複数の任官者がある場合の序列らしい。また「阿新（くまわか）は人名である。

本文に入ると、当代の後醍醐天皇が幕府に対して謀反を企んだことが露見した（…解釈が逆な様な気もするが）と言うので、皇位は龜山天皇系の持明院統に移るのではないか？という憶測が出た。人情としては理解できるが、大日本帝国は万世一系の皇統などと言うのは嘘で、常に醜い権力争奪

の葛藤が繰り返されていたことになる。

持明院統の従業員たちは下っ端の者まで勝手に喜んでいたけれども後醍醐天皇系のクーデター失敗の後も幕府からは皇位移譲の沙汰が無かつた。日野俊基が鎌倉へ連行されても、状況は変わらなかつたから期待していた方ではガツカリした。

そこで天皇が関わる事案にしては卑怯極まり無い話だが、持明院殿（後深草天皇）側から鎌倉へ使者を送り「当今（後醍醐天皇）が再び幕府転覆の企てをしている。是を糾明しなければ天下の争乱になる！」と親切に教えてあげたのである。知らせを受けた幕府は、天皇が嘘をつく筈は無いと思つていた考えを改め、重臣たちを召集して緊急会議を開いた。北条高時は先ず重臣たちの意見を聞いたのだが、相手が天皇となると重臣たちも軽々しく意見は出せない。暫くはお通夜の様な状況が続いたけれども、幕府権力者の子である長崎新左衛門尉高資（たかすけ）が進み出て「先年、土岐十郎を討つた時に（巻第一、頼員回忠事）天皇を交代させて置くべきであったところ、朝廷に氣を使つて制裁が寛容に過ぎたようです。乱を治めて平和を保つのが武士の勤めですから先ず後醍醐天皇を何処か遠方に疎開させ、大塔宮を二度と戻れない所に隔離した上で、陰謀に加担した日野俊基らは残らず消す他は無いですよ…」と遠慮なく過激に申し述べた。是に対して老臣の二階堂出羽入道蘊（…どううん）が暫く考えてから道理を踏まえて次の様に述べた。

「…高資殿の意見は尤もに存するが、一步退いて考えると武家が権力を得て既に百六十余年、其の威光は四海に及び、家門の繁栄は例を見ない。其れは一重に天皇を上を頂いて私心なく忠節を尽

くし下は庶民を慈しみ仁政を施した結果である。ところが現在は天皇の寵臣が幕府に拘置され天皇が帰依する三人の高僧が流罪に処せられており、天皇を軽視する武士の悪行と言われかねない。

その上に、更に天皇を遠方に遷し、天台座主の大塔宮を流罪にするとなれば天道に背き、山門の怒りを買うことは必定である。神仏を怒らせ人民に背かれれば武士と言えども安泰では済まない。

古来「君、君たらずと雖も、臣、臣たらずんばあだとしても、幕府が毅然として居れば、謀叛に加わる者が多くは無い筈であり、武家が慎み深くして朝廷を立てる様にすれば天皇も謀反など思い留まるものと存する。それこそが国家の泰平、武運の長久かと存するが、一同は如何であろうか？」

是を聞いた長崎高資は、自説を否定された訳であるから面白く無い。直ぐに大声で反論をした。

「文武の目的は一なり…と言うが此の選択は時によつて異なるであろう。平和な時は文を以て治め乱世には武を以て急に鎮める…戦国には孔孟（孔子と孟子）学問を用いるに足らず、太平の世には干戈（武器）用無きに似たり…と言うが、現在は既に戦時であるから武力を行使する時に当る。

異朝（異国）主に中国には、家臣が無道の君（不徳の主君）を討つた例があり日本でも承久の乱で北条義時・泰時が後鳥羽上皇・土御門上皇・順徳上皇ら皇族を不善の君として流罪に処したけれども是らの事は世論で妥当とされている。古い書物にも「君（主君）が臣を視ること土芥（ごみ）の如くすれば、即ち臣が君を視ること寇讐（敵）の如し」とある。本件の処理を遅らせて、もし朝廷から武家追討の宣旨（せんじ）命令書などが

下されるような事態になれば、後悔しても遅い！今は速やかに後醍醐天皇を僻地に送り奉り大塔宮は硫黄島（鬼界ヶ島）に流してあげる他はない。また陰謀の責任者である日野資朝と藤原俊基の両名は処刑が妥当である。此の処置に依つてこそ武門は安泰となること相違なし！」

民主主義には反するが権力者により強硬な意見が居高に述べられたので、其の場に居た者たちは嫌でも賛成する振りをするしか無くなり愚案が採決されたから道蘊も諦めてしまい、眉を顰めて（まゆをひそめてあきれで）退席した。反対する者が居なくなつたので議案はシナリオどおりに満場一致で採決され其れに基づき次の様に一方的判決が下された。当時は再審請求制度などない。

・源中納言具行・右少辨俊基・日野中納言資朝の三名は、後醍醐天皇に謀反を勧めた罪で死罪――

このうち日野資朝は既に佐渡刑務所に送られていたので早速、現地で処刑するように守護（県知事）の本間山城入道宛て命令が伝えられた。其の事はマスコミに依り京都にも伝わった。京都には資朝の子・国光が居り、やがて中納言になるのだが其の頃は未だ十三歳で阿新（くまわか）と呼ばれていた。父親が幕府から指名手配された為に京都右京区の真言宗御室派総本山仁和寺付近に隠れていたけれども、父親誅殺の噂を聞き「今は命を惜しむ時にあらず、父と共に討たれて冥土の旅の伴をし、また父の最後の有様も見たい！」と健気にも思い立った。母親に暇乞いをしたところ、当然ながら母親は泣き悲しんで諫めた。

「佐渡とやらは人も通わぬ恐ろしい島だと言うではないか。何よりも其処へ行くまで何日も掛かるとか、子供の身でどうして辿り着くことが出

来ようか！其れよりも、お前に離れては（私が）片時も生きて行け無い！」と言えば、阿新少年は「もし、案内者も見付からず、目的も達せられない（父に会うことが出来ない）場合には何処かの地で淵に身を投げて死ぬ心算です！」と固い決意を述べた。母親は幾ら止めても息子の決心は変わらぬ。と覚つて、只一人だけ残つて居てくれた中間（ちゆうげん）武家などに仕えた従者を付けて佐渡行きを認めたのである。

京都から佐渡までは、現代でも簡単に往ける旅では無い。隠遁生活で馬も無いから徒歩である。

京都を出てから十日ほどで越前国（福井県）敦賀の津（敦賀港）に行き、商人の船に乗せて貰つて佐渡国（島）に着いた。罪人の父に密かに会いに行くのであるから警察署や交番で聞く訳にもいかず、知人も居ない。其処で現代でも知られている北陸の豪商・本間家の佐渡館を訪問して慈悲を乞うことにした。中門の前に行くところ僧侶が居て「何方で有るか？また、此の家に何か用事がお有りか？」と訊ねた。

下男が「是は阿新（くまわか）殿と申し、日野中納言のお子です。中納言殿が斬られると聞き、其の最後の様を見る為に遙々と都から下つて来られたのです」と涙ながらに答えた。此の僧が心ある人物であつたので、直ちに本間家の主に知らせたから本間も哀れに思つて館内の持仏堂に入れてくれた。其処で旅装を解かせ足を洗わせ親切にしてくれたけれども、阿新が望む父との対面は許されぬ。実は本間家が中納言を預かる形で別の建物に置いたからである。一応は父子面会について役人に交渉してくれたらしいのであるが、役人の方では「処刑が確定している囚人に面会を許し

ては冥土に行く旅に支障が出る」という科学的根拠？で許さなかつたのだと思われる。

それでも遙々と阿新が面会に来たことは知らされたから五、六百メートル離れた場所に抑留されている父親（中納言）としては、阿新が都に居れば（父の）消息も知らずに済んだであらうけれども、今は近くで明日をも知れぬ此の身を案じてくれる我が子の心情を思いやつて悲しさが増した。父子共に涙の乾かぬ数日を送つていたのである。

原文には拘留中の父を目前にして逢えぬ阿新の心情を「情けなやの本間が心や」とあるが本間でも嘘でも幕府の権威には勝てない。

元弘二年（一三三二）五月二十九日の夕方に、

日野資朝は牢から出されて、役人から珍しくシャワーを浴びるように言われた。健康面の配慮では無くて処刑が決まつたことを意味する。資朝は「あゝ、残念なことだが、私の最後の様を見ようと遙々、訪ねて来た年端もゆかぬ息子とも逢えない俣で斬られてしまうのか！」と落胆して、言葉も口にしなくなつた。暫くは氣力を無くしたように涙ぐんでいたけれども、やがて悟りを開き覚悟を決めて雑念を払つたように冥想を続けていた。夜になると、牢屋敷の玄關に立派な輿が到着して資朝は其れに乗せられ、其処から一キロほど離れた河原に連れて行かれた。処刑の場所である。輿の中には筆記用具が置かれていたから、遺言状か何かを書かなければならない。役人たちが掲げる松明の灯りで辞世の頌（じゆ・しよう）祭祀の言葉を書き残した。

「五蘊仮成形（ごうんかりにかたちをなし）

四大今帰空（しだいいまくうにきす）

将首当白刃（しょうとうはくじんにあつ）

截檀一陣風（せつだんすいちじんのかせ）  
五蘊<sup>ごいん</sup>色、受、悲、想、織<sup>お</sup>物質と精神  
四大<sup>だいだい</sup>地。水、火、風

年号日付の下に名を書き、筆を置くと同時に後に居た斬り役が太刀を一閃したから日野中納言の首は敷き皮の上に落ちた。其れでも首無き死体は座した俣で倒れなかつたらしい。処刑後には常に獄中に来て中納言の話相手になっていた僧により形式通りの葬礼が行われ遺体は茶毘に付された。遺骨は阿新丸に渡されたけれども気丈な少年でも変わり果てた父親を見て、其の場に倒れ伏した。やがて阿新丸は父の遺骨を只一人の家臣に預け「一足先に高野山の奥の院に納めよ」と命じた。是は生前の父に逢わせてくれなかつた本間を恨んで襲撃してから父の後を追う覚悟なので、自分は病気を装って出立を延ばしたのである。

数日後に風雨が吹き荒れた。宿直の武士たちは嵐を幸いに勤務をさぼり、仮眠では無く熟睡してしまつた。阿新丸は本間家当主の寢室を襲おうとしたのだが其の夜に限って本間は寢室を変えた。別な部屋に灯りが見えたので本間の息子の部屋かと様子伺うと、其処には日野中納言を斬つた本間三郎と言う一族の武士が寝ていた。是は正に父の仇である。斬り込もうとして気付いたのだが：（気が付くのが遅いが）自分は太刀を持って居ないし協力者も居ない。どうやって敵を討つのか？暫く迷っていると、丁度、夏の季節なので灯りを求めて蛾が障子に取り付いている。少し開けると多数の虫が遠慮なく入り込んで忽ち灯火を消してしまつた。是を幸いに阿新丸は枕許の太刀をお借りして、其の持ち主を斬ろうとしたのだが寝た俣斬るのでは失札になる。そこで枕を蹴り上げ、相

手が驚いて目を覚ます瞬間に腹部を刺し、更に喉を斬つてから外に逃れて竹藪に隠れた。

本間三郎は斬られるときに大声を出したので、間もなく館中が大騒ぎとなつた。或る程度は仇も討てたので、阿新丸は此処で捕まつても良いと考えたけれども未だ発見された訳では無い。逃げられるだけ逃げて見よう：屋敷周りの堀を飛び越え様とするが深く広いので少年には無理である。そこで回りの竹藪から堀まで伸びている太い竹に頼つて向こう側へ越すことに成功した。

未だ夜明け迄には間があるので先ずは港へ行き出港する舟に乗せて貰おうと、海辺を探している中に夜空が少し明るくなつた。発見されれば無事では済まない。初めて来た土地であるから道も分からぬ。取り敢えず雑草の生い茂つた中に身を潜めていた。間もなく追つ手の軍勢百五十騎ほどが港近辺の搜索と検問を始めた。

阿新丸は一日中を草原で過ごし、夜になってから港と思われる方角に向かつたのだが、天が孝行の志を感じたのか、途中で年老いた一人の修行僧に行き会つた。老僧は少年の様子を不審に思つて事情を訪ね阿新丸は隠さずに有りの俣を物語つたのである。是を聞いた老僧は、此の者を助けなければ！と心に決めて「御安心なされ。港には多くの商人船が来ている筈である。其れに乗せて越後か越中（新潟か福井）まで送り届けてあげよう」と、疲れた阿新丸を背負い港に向かつた。ところが港内には停泊中の船が一艘も見当たらぬ。どうしようかと思案していたのだが、沖合に停泊していた船が風向きを感じて帆を張り海原に出ようとしているのが見えた。老僧は手を挙げ声を張り上げて「其の舟に乗せ給え：お願い申す！」

と頼んだ。然し忙しい船乗りたちは見向きもせずに出港してしまつた。老僧は怒り、法衣を整えようと出港する船に向かつて数珠を揉みながら「一持秘密呪、生々而加護、奉仕修行者、猶如薄伽梵」と、仏教専門用語で文句を言つた。最後の部分は「：ばかぼん」と読むらしいのだが、ばかと言われても神仏は怒ることなく、老僧の祈りを叶えてくれたから、沖の方から俄かに強風が吹き寄せ船は危うく転覆しそうになつた。船乗りたちは慌てて老僧に詫言を入れ、船を返してくれた。

間もなく追つ手の武士たちが港に駆け付けて来たけれども間に合はず、こうして阿新丸は無事に佐渡を脱出することが出来て、船は夕方には越後の国府港に到着したのである。見知らぬ旅の僧と会つたことにより、絶体絶命の危機から逃れることが出来たのは正に明王（みょうおう）の世界の大幹部である大日如来の命令を受けて悪魔を服従させる「尊」の御加護に依るもので有ろう。

やがて成人した阿新丸は朝廷に仕え、左兵衛督から中納言になつたと伝えられる。

### ○俊基誅せられる事、並びに助光の事

後醍醐天皇の意図を戴して主に幕府転覆の企画書を作成した公家は日野俊基と日野資朝であり、資朝のほうは前章段で消されてしまつた。残る俊基も鎌倉へ送られていたから「無罪放免」などは有り得ない。死刑となるにしても交通費を掛けて遠方に送るまでも無く、鎌倉で斬つてしまえ！とする経済的な意見により将来が絶望的になつた。

日野俊基は以前からの所願として法華經六百部を読み続けていたが、二百部を残した時点で死罪が確定したから心残りがある。無理だとは思つた

けれども、死刑執行を二百部讀誦分だけ延ばして貰うように嘆願して許可された。其の時から有難いお経を誦めば読むほど寿命が詰まるという妙な事になったのである。

一方、長年に亘り俊基に仕えていた後藤左衛門尉助光と言う者が居り、主が逮捕されてからは俊基の家族を護つて嵯峨の奥に潜伏していた。俊基の北の方は、夫が鎌倉に連行されたことで悲しみに耐えず泣き悲しんでいたから見かねた助光は北の方に手紙を書いて貰い、其れを俊基に届けようと秘密の旅で鎌倉へ向かった。途中で人々の評判を聞きながら鎌倉へ近づくと、悪い話が多いので不安を抱えながら鎌倉に着いた。

俊基が抑留されているという屋敷の近くに宿をとり、何とかして安否を知りたいのだが周囲の警備が厳重で情報も得られない。聞けるのは処刑の日が近い：と言う噂ばかりである。その中に「京都から連行された罪人は今日中に斬られることが決まったらしい。誠に気の毒なことだ！」とする話が伝わって来たので、慌てて町に飛び出してみると、既に物見高い地元の人々が辻々に集まっていた。処刑される日野俊基は囚人用の輿に乗せられて刑場の粧坂(けわいざか)鎌倉北西部の急坂へ向かつており、手前の葛原岡で検死役の工藤二郎左衛門尉(富士の裾野で曾我兄弟に討たれた工藤祐経の子孫か?)が受取り、大幕で囲まれた敷皮の上に座らせた。

是を見ている事しか出来ない後藤助光の心中は譬え様も無く気の毒であるが、やがて勇気を振り絞り工藤の前に出て平伏し、涙ながらに訴えた。「私は(斬られる)右少辨殿に仕える者ですが、最後の様子を知りたく遙々と下つて参りました。

お許しが頂ければ俊基殿に北の方のお文をお目に掛けたく存じますが、如何でしょうか？」

工藤は哀れに思い独断で是を許し「速やかに幕の中に入られよ！」と許してくれた。斬られる寸前に助光を見た俊基は驚いたが、差し出された北の方の手紙に涙が先立ち是を読むことも出来ず、暫くして涙を拭い手紙を見れば「消えかかる露の身の置き所無きにつけても如何なる暮れにか、無き世の別れと承り候わんずらん：(不安な日々、追い討ちをかけるように、貴方様との別れが来ることを懼れていました)」とある。言葉に尽くせない程の思いが濃すぎる程の墨で書かれていたから俊基は暫く呆然としていたが、やがて「硯やある？(筆記用具を借りたい)」と言った。

戦場で無い限り武士などの最後には辞世の歌が付き物であるから筆記用具は準備されているべきなのだが、罪人の処刑であるから無かった。時代劇でお馴染みの矢立(やたて)筆記用具は此の頃に来たらしい。此の場合も俊基の注文で硯箱が準備されたのである。俊基は箱から筆を出さずに小刀を使って自分の髪を切り、其れを筆にして北の方から来た手紙の余白に何か遺言を書きつけ筆(遺髪)ごと助光に渡した。受け取った助光は其れを懐に入れて泣き沈む様子は哀れである。

そうしている中に検死役の工藤が陣幕内に来て「余り時間が経つては：」と言う。俊基は斬首又は切腹用消耗品として置かれていた紙を取り、首の回りを拭いて其の紙に次の様な辞世の頌(じゆ、げ)「仏教の真理を述べた言葉」を書き遺した。

「古来一句 無死無生 萬里雲盡 長江水清：こらいのいつく、しもなくせいもなし、ばんりくもつきて、ちようこうみずきよし」

筆を置いて髪のを直そうとする間もなく背後に太刀が光り俊基の首が胴から離れて前に落ちたが、俊基は其れを抱え込むようにして倒れた。目撃していた後藤助光の心の中は哀れで譬えようも無いが、泣く泣く主君の遺体を受け取って茶毘に付し、遺骨を首に掛け、形見となった遺言の手紙を懐にして泣く泣く京都へ戻った。

夫の消息を待ち兼ねていた北の方は、助光の帰りを聞いて先ず「辨殿(俊基)の様子は如何に？」と人目も憚らず庭先に飛び出し「御戻りになるのはいつ頃になるか？」と問われた。助光は隠しても置けないのでハラハラと涙を流し「：もはや、斬られてしまわれました。是が最後に残されたお形見でございます：」と言つて遺髪・遺骨・遺書を差し出した。それらを見た北の方は、其の場に倒れて絶命した様に動かなかつた。無理も無いことで、一樹の陰の宿り、一河の流を汲む者も知らぬ同士ながら名残惜しく思われるのに、連理の契り(夫婦の深い縁)浅からず十年の歳月を共に過ごした身で夫が斬首されたとは：

やがて一族縁者主従が悲しみのうちに四十九日の法要を営み、未亡人は髪を下ろして墨染の衣を身に着け(仏門に入り)人里離れた庵(いおり)に住んで亡夫の菩提を弔った。後藤助光も鬻(もとどり)髪を切つて高野山に入り、亡き主君の冥福を祈つたのである。夫婦の契(ちぎり)、君臣の義、後世に伝わつて哀れな事である。(続く)

#### 【お悔やみ】

本会にも時々寄稿していただいた縄文語研究家の鈴木健さんが去る11月8日に逝去されました。89歳でした。ご冥福をお祈りいたします。